

資本：形而上作用としての (1)

橋 爪 大三郎

(受付 昭和58年5月10日)

近代とともに資本制の大運動が世界を席捲し、空間の全域に資本制的な編成を波及させている。この動向は、人類社会に、^箱ヒューマニズム以降の新たな地平を拓きつつあるが、経済学や歴史学など既存の諸学は、それを視るすべをしらない。諸身体の上に君臨するこの資本という特異な形象を、分析的に確定する作業が、焦眉の社会学的課題であると言えよう。

本稿(1)は、記号学的な形式観に定礎しながら、独自の行為分析を経て、身体と事物の特異な統合としての資本体の概念に達する。

目 次：

- 行為分析へ
- 行為秩序の展開
- 資本体 (以上本号)
- 喩としての貨幣
- 資本の形而上作用
- 文 献

【1】近代という名の歴史上の一大運動は、社会空間の全域のすみずみにまでその資本制的な編成を波及させることにより、なお刻々と自らの形態を更新しつつある。このような空間編成のなかで、(資本制的な)資本*1は、形而上的な専制とよぶにふさわしい君臨をはたすことになった。身体という具体的な出来事を集合的に編成する秩序たることを通じて、資本が、physical な準位に対して屹立する超越的な審級をなすという事態が、形而

m * n 第 [m] 節の、通し番号 n の注。

1 * 1 資本制的な資本とは、資本一般のなかでとりわけ、資本制に固有の運動形態をもつものをいう。通例そのメルクマールは、①資本市場の成立、②賃労働の成立、③資本制的貨幣 (=喩としての貨幣)、の3つとされる。

上の専制 (metaphysical despotism) という規定の由来である。

しかるに今日、この専制は、ますます不可視なものへ、その君臨の様態を変化させている。この結果、空間の資本制的な編成に異を唱える形而上学的な叛逆の試み*2のいくつかを失速させるにいたった。のみならず、資本 (もしくは資本制) という事態そのものも、なお学的言説の追訊の網を遁れつづけており、分析的言及の対象として照準されることすら稀である*3。

資本制とその動向を把捉するには、資本やそれに関連する社会諸象に対する一貫した記述手段を要する。この記述手段は、資本制の軌跡を計測するための座標系へと転化すべきものであるが、それには、この記述手段が資本制をかたちづくる固有の振動に共振するものであってはならない。ここに、資本制への方法的な接近が、記号学と結びつく必然がある*4。

資本、このもっとも枢要な近代の社会象を、事物・身体・言語の交錯のうえに織りだされる、特異な社会象として見定めよう。記号学は、こ

1 * 2 資本制の蔓延に抗する^{フンクラー}反対措定の代表は、言うまでもなく、マルクンズムである。マルクンズムの救済の教義は、資本制を抑圧と搾取のための機械装置と規定し、人類をその軛から解放すると謳った。だが私の理解では、この教義は、解放されるはずの実体を、当の資本制から不断に備給されなければならないという逆理を隠しもっている。したがってその運動は、資本過程の外部に屹立する教団=党への帰依にもとづく「形而上学的な叛逆」であるほかはない。それが現出させるのは、資本制の同位対立物たるにすぎない亜空間である。

1 * 3 資本のような重要な社会象に主題的解明のメスが加えられていない現状は、それ自身驚くべきことである。これは第1次的には、経済学の守備範囲に属する。しかし、その各流派は、資本を独自の象として積極的に描述するだけの理論的能力を欠いてきた。また他の諸学にしても、資本を追究する切実な動機づけを手にしていない。

1 * 4 記号学以前の諸学は、西欧のうみだす普遍思想に、自体的に内属していた。それに対して記号学は、この普遍思想の張る実定的な台座そのものを突き崩すように働く。この脱中心化的な運動を通じて、記号学は、西欧にはじまる近代それ自身を1個の制度として記述するに足るだけの、いっそう大いなる普遍性と記述能力の獲得を狙っている。(橋爪[1983b])

れに形式的な記述を与える際の手がかりとなる。

行為分析へ

【2】資本の挙動に迫真しようとする論及は、まず、行為への原理的な考察に定礎し、そこから出発する。

行為は、社会のもっとも基本的な事実である。行為において、身体を社会形式がとらえ、行為において、身体が社会形式を発振する。

社会空間は、すべての行為 (のみ) からなる空間である。なるほど、行為は、世界のさまざまな他のことがらに伍して、数ある出来事の一部にすぎないではないか、とも信ぜられよう。だが、世界がわれわれを訪れること自体、すでにわれわれの行為を経由する。行為は、「意味」や「実在する世界」を派生させる、それ以上溯及しようのない出来事そのものである。われわれとわれわれの社会は、このような出来事たる行為の膨大な集積にほかならない*5。

行為論それ自体はしかし、社会(科)学のなかで正当な地位を占めてこなかった。行動主義や主意主義の議論は、行為分析を主題とするかわりに、行為をそれと別箇の手続きや実体のなかに回収しようとはかる。そこでは行為への直截なまなざしはそらされている。

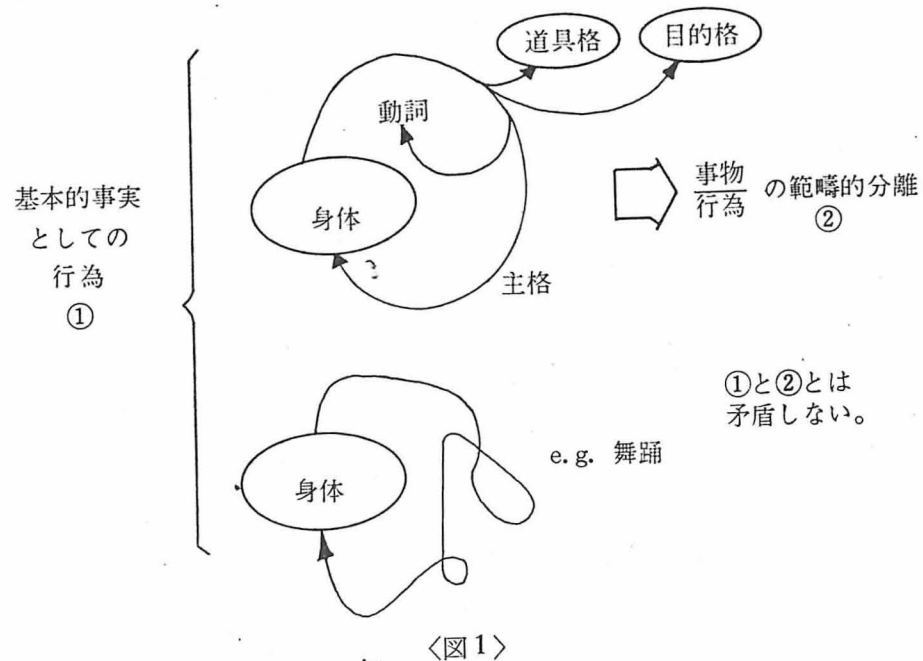
行為の原理的な考察は、出来事としての行為の実態を、すなわちその規範的な形式性*6を剔出し、説明的に再構成するものでなければならない。

【3】記号学的接近が、行為分析にどれだけの射程をもちうるか、考えよう。

記号学はもともと、言語学の分析手法にその根拠をおいていた。記号学の領域は多岐にわたるが、すでにそれが比較的よく成功をおさめている分野 (たとえば神話研究、分類体系論、芸術記号論、……) は、概して音韻論に範をもとめている。これらは総じて、意味的世界の成立を、音韻体系の場合と同様の対立のシステムにまで分解し、分析的に再構成しようとする、「意味の科学」であると言ってよい。

在来の記号学が、空間的なモデルに依拠してきたのに対し、行為の内蔵する秩序は、むしろ時間的なものだと考えるべきであろう。行為理論のモデルをもし求めるとすれば、音韻論ではなく統合論（文法理論）でなければならぬ。行為分析は、在来の記号学の枠にはおさまりきらないと思われる*7。

2 * 5 行為が基本的事実である、とは、世界についての意味ある体験は、かならず何らかの行為の裏づけをもつことをいう。だが注意すべきは、この事実(①)と、世界に内在する出来事に行為とそうでないものを考える2分法(②)とが、矛盾しないことである。後者の2分法は、行為の格関係に根拠をもつ。亘[1979]の「行為の格理論」をヒントにすれば、棒で柿の実をとる行為などは、棒を道具格、柿の実を目的格、……として配置する空間的な図式のうえに組立てられている。棒や柿の実は、行為をなしたたせる諸契機であるが、その格関係ゆえに身体像から放逐されて‘外界’に属し、事物としての存在性格を結露させている。



2 * 6 行為に関わる制約のうち、それを欠くと行為が行為ですらなくなってしまう規定関係を、ここで規範的な形式性とよんでいる。これは J. Searle の constitutive rule にほぼ相当する。

時間のなかで展開する発話行為の特質を、Saussure は言語の線状性 (linearity) として指摘した。行為一般もまた、こうした線状性をそなえている。そこでつぎに、文法理論と行為分析との並行関係が成立するか否かを考えてみよう。

言語 (文の集合) をうみだす行為は、発話行為であって、口頭の発話運動を介して時間的=線状的に展開していく。あるまとまった想念を表明する発話の1単位が、文である。言語学がこれまで扱ってきたのは、専らこの文のうえに想定される統合構造であった。ところが文は、物理的な制約のゆえに時間的=線状的に展開することを余儀なくされているものの、もともとはむしろ空間的な性格のものであると信じられる点が、注目に値しよう*8。

文法理論は、文の内部構造を扱う。言語学は、文をうわまわる範囲の統合構造を説明する理論を擁していない。ところが行為は一般に、それよりもはるかに長大な統合構造をそなえている、と想定される。行為秩序は、本質的に線状に展開するとみられる。

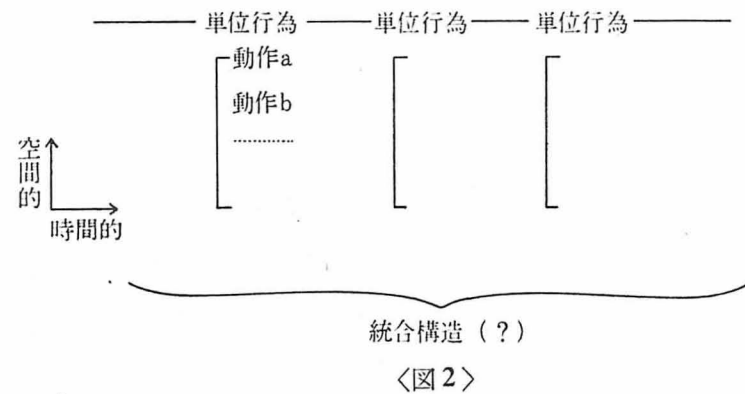
こうして行為分析は、文法理論からの単純な類推を踏みこえて、進まなければならない。

3 * 7 念のためつけ加えれば、記号論的接近は行為分析に不可欠である。行為は意味あるものであり、意味的世界の成立を背景とする。もともと文法論においても、統合部門は意味部門と連動するものであった。行為の意味的背景としては、たとえば(構成行為についてはその存在が実証的に確かめられている)身体図式をあげることができる。

3 * 8 文の空間的な構成は、格関係によくあらわれている。格関係を文の生成装置の中枢に組みこんだ文法理論として、C. Fillmore の格文法 (Case Grammar) があるが、これをみると、深層格 (表層の格関係におきなされる以前の格) の段階では、記号列が線状に連なるという制約はいささかも本質的でないことがわかる。他の文法理論は多く線状の記号列に関わる規則 (のみ) を含むが、そうした線状性が文法にとってやはり外見的なものであることは、変形規則を普遍的に要求することひとつをとっても明らかであろう。すくなくとも文までの範囲では、その統合構造はむしろ空間的だとみてかまわない。

【4】行為は一般に、ただ連続的に線状に展開するものではなく、下位単位やそのまとまりを含む、かなり複雑な統合構造をそなえているとみられる。既存の研究のなかから適当なモデルを発見できないので、われわれは最も単純に、行為は要素的な単位（単位行為）から組みあげられたつらなり（行為連鎖）である、と想定しておこう。

各人は自分の行為連鎖を意味あるものとして把持していると思われる*9ので、その事実を行為連鎖のうえで確定できる形式的な手続きを試作する必要があるだろう*10。



行為連鎖のうち十分に短い部分か、あるいは単位行為に関してであれば、行為分析はほとんど文の分析と並行するのではないと思われる。これは、「行為の格理論」(巨 [1979]) の示唆するところでもあるが、そうした要素的な行為は、むしろ空間的な展開をもつものであるから。

これに対して、上述の範囲をこえる行為連鎖の解明については、いくつかの方針が考えられる。ひとつの可能なプランは、「行為の格理論」の試みをさらに拡大適用することであろう。長大な行為連鎖は、複文、複々文、……といった複合的な格関係によってとらえられ、より小さな行為連鎖は、目的格、道具格、などの資格で、より大きな行為連鎖の統合構造に参入する。

4 * 9 ある秩序が存在することの有力な証拠はしばしば、それに関わる違反や障害がみとめられることである。これらは秩序の欠在として理解するしかなく、それを通じて当の秩序の存在を逆に明るみにだす。ここでのべた行為連鎖に、その諸要素間の統合 (syntagm) に関わる秩序が存在すると信じられるのは、ひとつには、精神病として一括される精神症状のなかに、そうした秩序に関わる障害がみとめられると思われるからである。

行為秩序の潰乱としてしてみると、精神病の与える障害は、後述する失行症の障害と、犯罪や違法行為など社会的なルールにかかわる違反との、中間に位置するのではないと思われる。社会的なルールに違反する場合の行為は、それが行為として成立する条件にはこれといって欠けたところがないのに、他の一連の行為と均衡裡に両立することがおそらくはできないために、社会規範によって排除されるべきものとなる。それに対して、精神病に起因する行為障害の場合には、行為の適格性を保証する要件のいずれかが欠落し、結果として行為に文法的な偏倚を与えている、と考えられる。

4 * 10 失行症 (apraxia) の多様な症例は、通常一塊のもののみなされやすい行為がどのような組成をもつかについて、適切な分析的描像を与える手がかりとなる。より詳細な別稿 (橋爪 [1979/1980]) から必要な論点だけを抜きだすと、第1に、大脳部位の器質的な損傷にもとづいて、自動化された行為が脱落しうること。これは逆に言えば、要素的な行為の一系列が習慣的に自動化するメカニズムが存在することである。第2に、器質的な損傷に由来する身体図式の解体にもとづいて、構成行為とよばれる型の行為が障害されうること。前者は、一連の動作や単位行為を束ねるイディオムの如きものであって、それ自身は時間的に展開するにしても、自動化によっていわば‘点’にまで圧縮されている、とすることができる。後者は、身体図式を準拠とするはずの、行為の空間的な定位の障害である。いずれにせよ、失行症が障害をもたらす行為秩序は、発話になぞらえるなら語彙もしくは単文といった程度の、さしわたしのごく短い連鎖にしか相当しない。したがってそれらは、「行為の格理論」のような空間的な接近によって対処できる範囲のものである。

人間の言語はなぜか普遍的に、動詞という品詞をもっている。これはどの文にも必須のものであり、この動詞を焦点として格関係がはられる。「走る」「叩く」等々の動詞は、われわれが自他の行為を類別し、認知し、了解する基本的な枠組みを提供するものである。この事実を、われわれがちょうどこうした動詞 (ならびにそれを焦点とする深層の格関係) にみあうかたちで、われわれの動作を切断し、分節し、切りだして、単位行為へと組みあげているのではないかと想定してみるきっかけを与える。

行為連鎖の間隔を小さく絞っていくと、単位行為とよぶべきものに到りつこうが、

「行為の格理論」は、単純であり、また行為の言及可能性・言表可能性を根拠づけることができる、などの点で望ましいが、他方で困難も予想される。行為は一般に、長大で複雑なものとなるほど、内在する形式的な秩序に支配されて展開する純粹さの度合が、急速に薄れていくように見える。(これは、文法理論が、文をこえた談話分析や物語分析にすんなり延長できない事情と、通ずるところがある。)

【5】長大な行為連鎖を扱うのが困難であるのは、そこに想定される秩序を、行為に内在する要因だけによっては追いきれないからである。行為は本来、環境(行為外的な要因)に対する反応として営まれるという側面をもつが、そこから、①物的環界からの反作用、②他の行為との相互作用、のものとおかれることになる。①は行為が労働であり、技術として形態化していく契機を、②は行為が分業の実現であり、社会規範へと転態していく契機を、それぞれ与える。これらはいずれも、これまで記号学がしかなかったものである。

さて、行為がしばしば行為外な要因によって左右されるとすると、行為連鎖をそれに内在する秩序において追尾することは、必ずしも妥当でないことになる。行為連鎖は、つねに攪乱によって衝き動かされ、偶有的に展開する過程とみえてこよう。それでは、行為の統合構造は想定不能なものか?

もしも行為がつねにランダムな生起にまかされており、そこに何の秩序も存しないのだとすれば、そうした行為連鎖を記述・説明する努力もまた不必要となる。これはこれで、悲しむべきことではない。しかし、人間の行為がまったくランダムに展開するという想定も、またはなはだ非現実的であろう。

実態はたしかに、両者の中間にある。すなわち、人間の行為連鎖のうち、

これ自身、身体肢節の各部位の協働を前提とする、かなりいりくんだ複合態である。そこで便宜上、各肢節の動きを動作とよぶことにすると、一般に行為連鎖は p. 132 の〈図2〉のような構成をとる。

ある一部分は厳密に形式的に特定されており、またある一部分はきわめてランダムであって内在的な秩序をもたず、のこる部分は両者の中間状態にあるだろう。

行為分析の当面の戦略とは、それゆえ、行為連鎖が一定の規則性にしたがって配列されていると考えられる場合に、関心を集中することである。そして、そのような行為連鎖が実現するための条件は何か、そこに見出される行為秩序はなにか、を解明することである。

行為秩序の展開

【6】行為は本来的に、自由である*11。

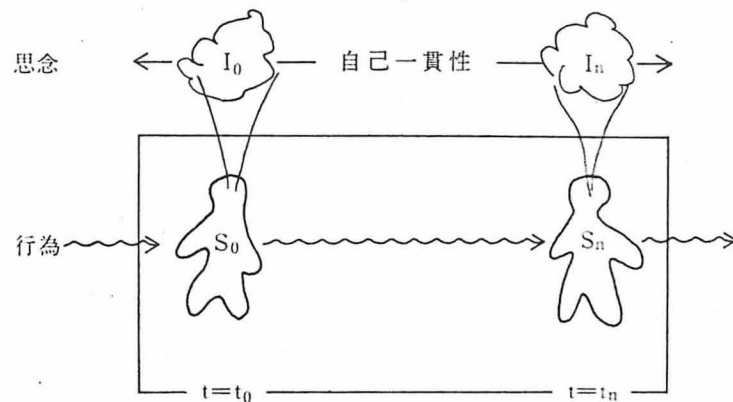
自由であるはずの行為が、なにか秩序ある行為連鎖として展開する場合には、その行為を中止したり別のものにしたたりする自由を行使しない、という条件がみたされているはずである。この条件を、思念の自己一貫性(self-consistency)とよぼう*12。行為連鎖が、行為者の身体のある状態(も

6 * 11 行為が自由であるとは、人間の身体各肢節の動作が十分に分節されており、随意に組みあわせうるものであることをいう。生理的・物理的な制約そのほかにもとづく限界を除けば、それまで継続されてきた行為の連鎖によって、ひきつづき生ずる行為が(なにか自然法則のごときものによって)決定されてしまうと考えるべきではない、積極的な理由はない。

6 * 12 行為の主意主義的な理解は、行為を、企図やそのほかの、行為と別箇で行為に先立つ心的プロセスに還元してしまえると発想する。こうした理解によると、行為連鎖とは、あらかじめ企図された行為プログラムをたんに身体肢節の諸動作のなかに順次実現していくだけのプロセスであることになってしまう。したがって、行為者が自由であるのは行為に先立つ企図設定の際だけであり、いったん企図が設定され行為がスタートしてしまうや、行為者とその行為する身体はひたすら当初の企図をなぞり、その企図に奉仕するだけのものとみなされる。

しかし行為は、つねに行為の現在のなかで展開してゆくしかない、1個の事実性である。行為を中断したり別のものにしたたりする恣意の可能性もまた、行為の現在につねに帰属しており、行為の自由の不可分の一契機をなすと言えよう。そこで、こうした恣意を発動しないという思念の持続的なありかたをも、行為の構成に参与するものとして主題的にとりあげる必要がある。これが、思念の自己一貫性にほか

しくは単位行為) S_0 から、別の状態 (もしくは単位行為) S_n への、時系列に即した変化であるとする、それに対応して行為者が抱く思念 I_0 , ……、 I_n は、(どのような内容でもよいが少くとも) この行為連鎖の展開を不可能とするものであってはならない*13。



〈図3〉

行為が自由である度合に応じて、行為の成立が個体の心的権能にかかる度合もまた大きくなる。そうした心的権能のうち、思念の自己一貫性を支えるものとして、心的な自己把持を考える。

【7】心的な自己把持 (psychische Selbstfesthaltung) とは、反射や運動暴発やその他の内的・外的攪乱要因に抗して、行為を自律的に展開する場合に想定すべき心的権能をいう。卑俗に言えば、それは、“ジブンハイマコレコレノ行為ヲシテイルトコロダゾ” という理解にあたろうが、むしろ意識的・意志的な状態よりも、ただ集中が持続するという事実的な過程の抽象を念頭においている。

心的な自己把持が調達され、維持される代表的な場合としては、(i) 自

ならない。
6 * 13 思念の自己一貫性は、単位行為 S_0 から S_n までの両立可能性ないし無矛盾性を含意する。

己把持への強迫的な固執による、(ii) 相互行為が安定的に推移して、ついには儀式のようなものに転化する、(iii) 行為の反復が習慣化し、ついには習俗のようなものに転化する、(iv) 宗教的な戒律や、資本制の蔓延など、空間を特定の形而上学ないし形而上作用 (後述) が蔽う、などの場合が考えられよう。

心的な自己把持は、秩序ある行為連鎖の原因 (たとえば、企図のようなもの) ではない。それは、自律的な行為連鎖が展開するための条件であり、必要に応じて動員されるものである。

【8】自由な行為の集積である社会も、ある角度からみると、自律的な行為の展開系列を下位秩序としてかくすものとみとめられる。そのような行為の下位秩序として注目すべきは、まず技術とその展開系列であり、ついで行為の純粹形式とその展開系列であり、さらに組織体とその展開系列である*14。

技術は、物的世界のなかで物的世界に働きかけそれを人間的世界に作りなそうとする行為が、かえって物的世界の側から自然的な秩序にもとづく制約を課せられながら織りなす行為秩序、である。行為の展開にかかわる物的世界の側からのこの規定性 (Bestimmtheit) は、身体それ自身が物的世界のなかでのひとつの事物であり、その限りで、行為の手段や行為の対象としての事物と対等な相互作用のうちにおかれる、という不可避な事実にもとづく。

行為の手段である事物は道具であり、行為の対象となって変形を被った事物は加工品である。道具は通常、それ自身が再び加工品である。この回帰的 (recursive) な関係によって、行為はそれ自身および他の行為と複雑な相互関係におかれる。事物 (加工品) を通じた行為と行為との関係は、

8 * 14 技術、行為の純粹形式、組織体——これらはもともとその原理において区別されるべきものではあるが、それが具体的に実現されるときには互いに重なりあうのをさげられない。資本という作用も、後述するように、技術と組織体との重畳的な展開のうえにある。

一方向的なため、時間的な性格を帯びる。すなわち加工品のたぐいの事物は、それを定在させるためにかって生起した行為（の系列）の集積的な帰結、いふならば過去の集積回路として、行為の現在を規定する*15。

技術として実現される行為秩序の展開系列を、技術論が分担する*16。

【9】行為の純粹形式は、身体が（物的世界の外的対象でなく）作動する身体自らに能動的に関わって、もっぱら身体の帯びる形式性を純化して浮きたたせようとする志向のもとに繰りひろげられる行為の展開系列である。

8 * 15 技術が違反することのできないのは、行為する身体や行為に関連する事物を含めて物的世界に貫徹する自然法則である。この否定できない事実眼を奪われると、ひとは、技術を行使するに際して発揮される恣意の余地などわずかであり、要するに技術として発現する行為秩序の実体は自然的秩序にほかならないではないか、と考えてしまいやすい。だがこの結論は、はやまっている。行為を通じて事物（加工品）のなかに刻まれ、事物（加工品）を通じてふたたび行為をも規定することになるのは、ほんらい自然のなかに根拠をもたない形式性、人間固有の行為＝表現にもとづく形式性なのであって、このような回路をとおって、技術は、行為に固有の特殊な行為秩序をも再生産しているのである。このように技術が実現する行為秩序は、社会的なものである。技術は、自然的秩序と社会的秩序の境目を縫うようにして、自らを展開する。

なお、身体それ自身も事物であることにもとづき、（自己の）身体を手段的に行使し、あるいは（自己の）身体に对象的に関わろうとする行為が、技術として成立できることになる。いわゆる身体技法がこれである。身体技法が、行為する身体の外に物的定在をうみだす以上に、もっぱら身体それ自身への自己関係へと純化してゆくとき、行為はその純粹形式へとかぎりなく近接する。

8 * 16 行為論としての技術論は、まだほとんど未開拓の研究分野だと言ってよい。

行為はこれまで、行為そのものとしてではなく、行為に先立つ企図として、あるいは固有の形式性を捨象された有機体の反応として、考察されてきた。行為の実態は、そのいずれにもなく、その形式性 (formalité) にある。この形式性は、行為の企図や行為に関する言表とは別に、身体それ自身のなかに蓄積されるしかないようなものだ。

行為へのまなざしに支えられた技術論は、技術史を行為秩序の展開史として再構成する。こうした技術論の延長上に、資本という社会形象の記述と説明がはかられる。

具体的にはこれは、舞踊、音楽、美術その他の美的な行為*17の諸範疇に通じるものである*18。このような行為は純粹な形式性を発振し、またそれを享受する*19。

9 * 17 言語に関わる行為がここでどう位置づけられるかが、問題となる。発話行為をとりあげてみれば——書記行為はそれ自体として興味ぶかいが、発話行為に比しては派生的なので、ひとまず措くとする——、たしかにこれも、身体が自分自身に関与して一定の形式性を発振しようとする、行為の純粹形式としての要件をそなえていよう。ただその場合に特殊であるのは、実現される形式に然るべき指示と表現の機能が託されている点である。これを可能にするのが言語規範であるが、発話行為はそれを前提とし、行為の純粹形式から派生する2次的な指示と表現の機能を担うところに、その本質を措いている。

言語が美的な形象につらなるためには、それゆえ、そうした発話行為の機能が括弧にいれられ、それ自身の純粹な形式性（たとえば韻律）へといったんさしもどされる必要がある。言語が機能的なものとの間で一定の揺れと振幅をもって存在するのは、普遍的な事実である。どの文化にも相応する詩形式が見出されることが、それを裏付けている。（詩的言語に、発生期の言語がもつと信じられる特権を付与しようとする試みには、慎重でなければならぬ。）

9 * 18 美は、ごく概括的にのべれば、感性と形式との相互規定関係にもとづく嚮鳴のなかで生じる、と考えられる。美的洗練の通例とは、この形式を身体から外置し、制度のなかで彫琢するという処方であろう。（日本の美の理念は、これと逆の行き方をとるように思われる、橋爪 [1983b] 参照。）

美的な行為を動機にさかのぼって理解しようと「美的な欲求」を仮設したりすることは、美的現象の本性への接近とはほど遠い。欲求とは、欠在と充足への志向とだけを含意する無定型な概念であり、その欠在が美的なものによって充足されなければならない必然性を、同語反復以上に語りえないからである。

9 * 19 行為の純粹形式といえども、行為としては、物的世界のなかで実現されていくしかない。音楽であれば楽器のような演奏手段が、描画であればそれを定着させる画材が、必要となる。そこで、美的な行為ものこらず、技術としての性格をおびてみえてこよう。それはたしかだが、肝腎なのは、美的と称される行為のなかでは最終的にはそうした素材の物的性格が無化されるよう、行為が形式へ照準する事実である。

行為の純粹形式はしかし、その展開のなかで、物的な素材にかかわる技術の論理から、ますます多くの負荷を課せられるようになる。特に複製技術と媒体の発達とが演奏（表現行為の現在）を蚕食する歴史的プロセスは興味ぶかいが、稿を改めざるをえない。

このように実現される行為の展開系列を、行為の純粹形式論が分担する。さいごに、組織体は、行為(する身体)が互いに他の行為(する身体)を自らの行為の構成要件となし、全体として行為する諸身体かならるひとつの配列へと編成されるところに生ずる、行為秩序とその展開系列である。組織体は、行為の現在が互いに他を包絡する、行為の相互作用の直接性を離脱できない*20 ため、空間の局部に実現される協業系として現象する。

協業系とは、狩猟のための集団や、親族集団や、軍隊などのような、特殊目的のために空間の局部に蝟集して協働行為する(ことのできる)身体の集合的な編成のことをいう。協業系は分業系と相補的に、空間を両断する。分業系は、いかなる蝟集の形態とも無関係に、空間の全域に散在する行為する身体が、相互に制約しあう事実を概念化したものである。この相互制約は、主要には、事物(加工品)の移転(もしくは交易)によって担われるのであるが、市場はその発展の極相である*21。

組織体として実現される行為秩序とその展開系列を、組織体論が分担する。

【10】ある空間において行為する諸身体が、それら身体を総体として次の時点にむけて存続させる性能をもつとき、その活動は労働であるか？

9*20 組織体の概念を、人々の相互作用の直接性に結びつけて規定するのは適切であろうが、次の誤解と結びつく可能性がある。すなわち、組織体はなにか命令や暴力のような直接的な作用によって形成される、とする解釈である。

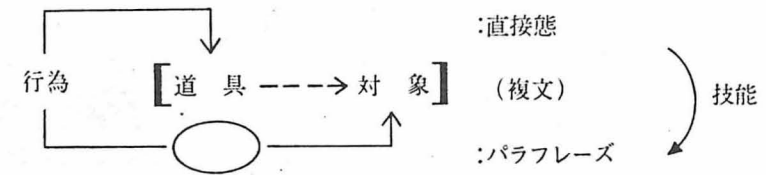
命令は、ある人間の一方的な意志を表明できる、言語のもっとも基本的な性能のひとつであり、たしかに組織体のなかで不断に見出される発話行為であろう。だがよく考えてみると、命令や暴力は、局部的な波及をかたちづくるにすぎず、小域的に安定な諸身体相互関係をかたちづくるにはいたらないものである。命令がつねに実効的であるためには、全域に作用する権力からの反照が必要であろう。

こうして、組織体の考察は、法現象や正統性観念の分析と結びつかなければならない。

9*21 すべての社会が普遍的にこのような、事物(と言語)の交流コミュニケーションの回路を内蔵しているという指摘としては、つとに Lévi-Strauss のものが有名である。

る*22。単純に言えば、労働は身体カタクの存続ソウゾクを含意する。

労働は、もっとも直接的には、自らの行為連鎖を道具系ドウジケイのかたちで実現するであろう。道具系ドウジケイにあっては、道具(すなわち行為手段たる事物)は、行為者の展開する行為の統合構造に服している。道具とは言うなれば手の延長であり、労働に必要な身体肢節の運動性を、事物の物的性能のなかに外置したものだ。道具系は行為に、複文的な統合構造をもちこむ。そこで道具は、いったん行為の対象とされているようにみえる。しかしそれは、道具がその行為によって企図づけられ、行為のほんとうの対象へと向かうためにほかならない。こうして道具系がうまく作動するためには、複文的な統合構造をときほぐす技能が必要である。



〈図4〉

もと道具であった事物の内蔵していた因果連鎖が、技術上の要請のなかで膨張し、ついには1個の身体カタクの行為の統合構造から外にはみだしてしま

10*22 雨乞いの呪術や種々の儀礼など、存在理由や効用の明らかでない様々な活動を‘労働’から排除する視角は、同時に、‘生産’という概念枠の定位へも否応なくむかう。この視角は、資本制的な空間編成の運動に内属しており、必ずしも普遍性を有しない。具体的には、操作的でない状況で、分業系のなかで一塊のものとして結びあっている諸活動のうちどの部分が‘生産’にとって不要であるかを識別し排除する恣意的な手続きをとることをまぬがれない。

ここで改めて労働概念を定立することで樹立したいのは、労働と戦乱との対比である。戦乱とは、一方の身体を抹殺することを通じてのみ他方の身体カタクの存続がはかれること、にほかならない。戦乱においては、正統性が決潰している。戦乱を回避し、全域にわたり正統性を効力あらしめることが、権力工学の主題である。(橋爪 [1983a] [1983b])

う場合、行為秩序は機械系へと移行している*23。機械系は、労働の単純な形態がそなえていたような行為の統合構造をそのもとへ下属させる、より大なる行為の集合的な秩序を設定する*24。逆にみると、この機械系のもとで、個体の紡ぎだす行為連鎖は技術として完結的なものではなくなっている。

機械系は、自律的で完結したものであることをやめた諸個体の行為連鎖を、技術上の要請にしたがって完結した行為秩序へと編成しなければならない。そのため、機械系は、組織体として自らを実現しようとする*25。

10*23 機械を道具から区別する場合、ふつうは、製造工程や材質であるとか、部品の数、組立ての複雑さ、作動の原理（ことに動力源の有無）などがメルクマールとなる。これに対して、ここで提起してみたのは、行為分析にもとづく両者の区分、すなわち、行為秩序の内部で当該事物がいかなる位置を占めるかに着目する区分の試みである。それゆえ、ここで区別されるのは、むしろ行為秩序の2系列、道具系と機械系である。このさい、事物の組成など従来のメルクマールは、両者を区別する積極的な手掛りとはならない。同一の事物でさえ別々の系列に下属しうる。

10*24 道具であれ機械であれ、労働過程のなかにはいりこんでくる事物は、既往の行為の集積態にはかならない。それらは、既往の行為が、労働する行為の現在に到達し、行為を制約する仕方なのである。

いわゆる機械は、動力を内蔵していることを根拠に、人力から離脱し人間の行為連鎖をそのもとに下属せしめた。このように圧倒的な仕方で行為の現在に到ることが、機械系の特質のひとつである。自動化は機械系の理想である。いくつかの工程はまったく人力を要せず、もはや到達すべき行為の現在をもたないかにみえる。しかし労働する行為の現在は、この場合でも決して消滅するわけではなく、分業系のなかを別の工程へと移動してゆくにすぎない。

10*25 組織体は協業系として現象するから、機械系は協業系として人々の身体を編成することになる。

協業系は、かならずしも機械系であるとは限らない。協業は、大きな石でも動かすときのように、複数の人間が互いの行為を同調させるならば直ちに生じる。

機械、機械系および組織体の関係は、それほどストレートではない。いま、まったく1人でこなせる技術があったとして、彼がその1工程を「機械」化したとしよう。機械が彼のコントロールに服している限り、この技術は道具系として展開している。ところがこの機械を高率で稼働させる必要が生じ、24時間操業に転じたならば、交替で就業するn人の行為秩序は、協業系として束ねられているのであり、n人は組織体としての実態をもったことになる。

資本体

【11】道具系もしくは機械系において、反復的に（集合的な）行為連鎖のなかに織りこまれる事物（道具、機械、その他加工品系列の事物）を、（広義に）資本という*26。資本は、技術が展開できるための前提であり、問題の行為秩序の可能条件であって、その限りで行為秩序の^{キヤピタル}主役に転化すべき素地をもつ*27。

11*26 経済学で資本といえば、土地、労働と並んで生産の3要素のひとつと理解される。すなわち、土地が経済活動によって生産することのできない賦存物のすべてを、労働が生産工程で労働者の供するサービスをいうのに対し、資本とは、経済活動の産物であって再び生産工程に投下されるもののうち、一定期間をもちこして存続するものをいう。資本は、生産的用役を提供する事物なのである。

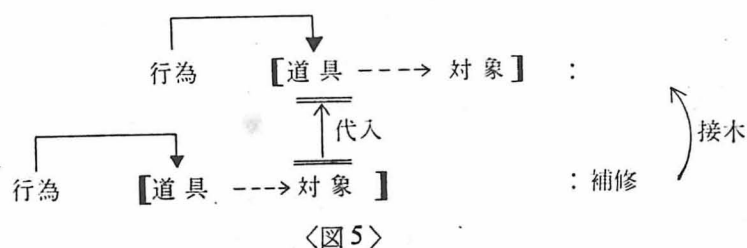
ここでの概念規定も、この区分を踏襲している。しかるに、資本と呼ばれるこの事物は、少なくとも1期まえまでの既往の行為によって変形を施され、独特の形式性を帯びたものである。そこでたとえば土地が、開墾の成果である農地として所在するとすれば、その農地は、土地からの差分において、資本であると規定すべきであろう。

このように定義される資本は、財の区分のひとつ（資本財）である。これに対して、市場において、資産の（とくに貨幣の）自己増殖をめざす運動（G—W—G'）をば、資本と定義することができる。前者は市場を前提としないゆえ広義の資本、後者はそれに対して狭義の資本とよぶべきであろう。両概念は行為論、交換論の水準でそれぞれ定立されている。

11*27 行為者が行為秩序のなかで主導的な位置にたち、道具などの行為手段をその支配下におくのは、自明のことのようだが、表象や心像のなかではしばしば容易に逆転しうる。一般に道具が保つと信じられる mana（呪的な威力）の観念には、行為秩序と物的世界の秩序との神秘的な親和性が託されている。その観念のもとでは、行為者は、両秩序の媒介者たる行為手段に導かれて、ようやく彼の行為を展開できるにすぎない。

技術的な制約のなかで行為が特定の形態に固定する傾向がある場合には、このような主導部の移転が生じうる。だがその移転は、行為秩序のなかでつねに反転可能なもの、つまり幾分かは想像上のものであり、要するに物象化の範疇におさまる事態にすぎない。これに対して、資本体のような行為の集合的秩序が課する主導部の移転は、形式的な根拠をもった、事実上のものでありうる。

技術が反復的に行使されるあいだに、総じて資本は自らを更新する。これは、もっとも単純には、道具や機械の損壊が補修されることをさしている。道具や機械を補修したり改めて造りなおしたりする作業は、それを行為手段として展開される作業とは異なる系列に属する。補修や改造にかかわる行為連鎖は、もとの行為連鎖にいわば接木されている。



接木の幹にあたる行為連鎖、技にあたる行為連鎖は、回転が異なっており、その両者の接続の仕方から「資本が自らを更新する」という自己運動的な外見が生じる。

資本の補修や再生産に関わる行為連鎖相互の接続関係は、分業系の相互連関を構成する重要な契機である。資本の代入が市場での交換を通じて実現されるならば、分業系の相互連関は市場取引にその表現を見出す。

【12】更新を通じて持続する資本からひるがえって機械系をみるとき、それは、幾多の資本をつつみこんでそれらとともに自らを再現する組織体、として把えられよう。技術的な要請の裏付をもって叢生する、このような事物と人間との集合的な運動形象をば、資本体^{*28}と名付けうる。

12*28 「資本体」という概念をわざわざ形成する狙いはもちろん、資本論を商品論でも所有論でもなく、行為論として構成したいからである。

本稿の全体は、Marx の資本理解に対する反措定、すなわち「反資本論」の予描的な試みである。

『資本論』の構成において、資本制的な資本は、

$$G-W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A_r \end{matrix} \right\rangle \dots W' - G'$$

という有名な範式でとらえられている。生産過程をなりたせる形式的な諸特徴は、

資本体は、それをかたちづくる資本（ないし機械系の各構成素）のあらゆる代置を通じて、存続する可能性をもつ。すなわちそこで存続するのは、実体的なそれらの構成素ではなくて、諸身体の繰りだす行為連鎖を配列・編成する特定の形態もしくは形式性である。

資本体の能動性は、資本体の互換的な構成素が空間内に遊離していることを前提しており、その遊離の度合いが高まるとともに一挙に加速される。この能動性は言うなれば、アミノ酸溶液中で蛋白質が発揮する能動性である。

資本体の構成素の遊離を増進させるのは、商品化の過程である。商品化の過程から、資本体の能動性は、採算の制約と利潤動機を受けとる。利潤動機は、商品空間のなかにおかれた資本体の能動性の、2 次的な表現である^{*29}。

商品諸範疇からなるこの範式に解消される。行為論の記述しうべき資本の現象形態は、私的に所有されている資本の内密なふるまいのなかに隠されている。

Marx が資本のこれ以上の行為論的な究明に向かわなかった理由は、ひとつには、彼が資本制批判を価値論、すなわち商品諸範疇のうえで演繹的に構成される搾取の理論によって、十分に遂行できると信じたためであり、もうひとつには、資本制下ですべての労働形態は単純労働へ必然的に分解をとげ、単純労働は互いに文脈づけ合うことなく生産過程のなかで任意に結び合わされると信じたためである、と思われる。しかし今日、このいずれの想定も全く妥当でないことは、すっかり明らかとなっている。

マルクシズムの救済の教義にもとづく解放の実践形態は、行為の秩序に関する混乱（すなわち、利潤動機や賃労働契約から切断された遊離身体が無規範な氾濫）と、それを鎮圧するための権力体の過剰（党官僚制）とをまねいた。このような無用の解放の形而上学を解除するために、資本体の概念を、資本制的な商品関係以前に、それどころか市場の外に、樹てる必要がある。

12*29 採算を下回って操業しつづける資本体は、資本体を構成する資産をつぎつぎ担保とする結果、早晚分解を余儀なくされる（倒産）。それゆえ商品空間のなかにおかれた資本体はつねに、採算を上回る方向へ、すなわち利潤へと志向するように運動する。この志向は、市場で互いに接続しつつ集合的に自らを再生産する資本体が共通にしたがうべきルールなのであり、このルールが描きだす能動性を資本体上の1個の主体性として解するところに、資本体の利潤動機が結ばれる。資本体の

【13】 交易が発展し、市場が全域化したような社会では、いく筋かの資本体を抱える分業系は、しだいにその相互連関の多くを市場での交換に移しかえることとなろう。資本体は、加工品を内蔵し加工品を産出することを通じて、相互に接続しあう。

初期には資本体は、分業系のなかに結露しはじめても、自らを急速に増殖できない。交易や市場を通じて流通するのは、資本体として具体化されている生産工程の最終産物（のごく一部）であり、それ以上ではないからである。資本体は、他の組織体のあいだにまぎれて、共同社会の伝統と習俗の沈澱のなかでその能動性を膠着させている*30。

資本体は、その各構成素の分解性と互換性が高まってゆくに連れ、徐々にその文脈自由な展開可能性を獲得していく。資本が機械装置の形態をとり、ことに、行為連鎖の断片が正則化されて機械系の互換的な構成素となると、資本体は産業化の段階に達する*31。

資本市場と賃労働市場の成立によって、資本体はその代数的互換性において増殖する社会形象としての本性、すなわち資本制的資本としての能動性を全く露わとする。資本体の構成素が、労働力を含めて、のこらず市

集会的な過程は、こうして有機体的な解釈を許すものとなる。Marx の体系にいう「資本家」とは、このような動機をあてがわれた機関の名称にほかならない。しかし、マルクイズムの教義は、資本体の動機もしくは資本家の実体視に（いくぶんか）とらわれ、そこからの脱主体化をはかる戦略をたてたのである。

13*30 このような膠着は、ふつう経済外的強制として語られる。これは(近代的)所有権、たとえば処分権の全面的な発動を各人に許すものではなく、身体と事物の配列である資本体を、利潤へ向けて再編する自由を保証しない。

13*31 機械系の構成素たる行為連鎖の断片を提供するのは、共同社会から剥れてきた遊離身体である。もしも機械系が、行為連鎖の断片でなく全幅を互換的に下屬させてしまふとしたら、それは奴隷制的な資本体の構成である。この構成にもとづくシステムでは、後述するいみでの生産と消費とをそのシステム内部で対照的に定立することができず、生産と消費とを市場を通じて連携することもできず、市場のもとで資本体を拡大させていくこともできない。

場で入手可能となることが、ここで重要である*32。それらの価格は、採算と利潤の算出を可能とし、資本体の配列・編成の規準を与える。M. Weber の指摘する計算可能性は、このような資本体各部の互換性の成立と照応する。

以上のような資本の変貌は、市場での貨幣が資本制固有の性能、すなわち信用創造機能を発揮しはじめる変化と並行する。資本市場（すなわち、資本制的貨幣の市場）は、資本体同士の競争的な自己増殖傾向を共軛する、相互抑制的な均衡をもたらす。資本制のもとでは、資本市場が成立しており、貸付け手段としての貨幣をめぐる競争的均衡が成立する。そこで定まる利子率は、全域的に、資本対利潤の比率を平準化するための作用素である。

資本制的資本の作動をなお精緻に解析するため、資本体の^{メタモルフォーゼ}変貌を演出する、貨幣の^{メタモルフォーゼ}変態へと視線を転じよう。(次回完結)

13*32 前資本制的資本が、商業資本 (G—W—G') もしくは貸付資本 (G—G') の形態をとったのに対し、資本制的資本は、賃労働用役の使用にもとづく価値増殖過程を含むものである、と Marx は規定する。われわれはかわりに、機械系が資本体として自己運動する様相をみとめよう。

(文献は、次回完結時に掲げます)

Summary

Capital: as a Meta-physical Operation (1)

Daisaburo Hashizume

The great movement of Capitalism has overwhelmed the whole world since the start of the modern age, now extending its capitalistic formation all over the social space. Then this movement seems to have begun showing our human society the new scope of post-humanism, but the social studies ready-made such as economics or history are at a loss to see it. So it is an urgent problem for sociology to make this queer figure called Capital analytically clear, which dominates everybody's body.

The first half of the paper, based on a formalistic view of semiology, develops action-analysis originally, and reaches the concept of 'Capital-Body' as a special syntagm over bodies and things.